

皆野・長瀬ロータリークラブ

週報

◇例会日
◇例会場
◇事務所



第1・第2木曜日 12:30~13:30 第3・第4木曜日のいずれか 18:30~19:30
長瀬レクリエーションホテル 養浩亭
〒369-1305 秩父郡長瀬町長瀬1446 養浩亭内
Tel:0494-66-4134 / Fax:0494-66-4134 e-mail:minanaga@chichibu.ne.jp

UNITE
FOR
GOOD

よいことのために手をとるあおう

第1730回例会

令和8年6月4日(木)

【会長の時間】

畝 徳治

皆さん、こんにちは。米山梅吉とポールハリスの話をしましたが、ポールハリスが来日した時の様子の2回目になります。悪天候などにより来るのが遅れて、日本での滞在は短かったのですが、行った植樹についてお話しします。



歓迎側は凝縮された日程のなかで、日本を凝縮して見てもらおう、味わってもらおうとする。ポール・ハリスの滞在は、結局はごく短いものになってしまった。それでも一見に如かずである、我々は、接してみてもその実を知る。いかなポール・ハリスとて、そこには変わりはないであろう。日本のロータリアンの熱情を身をもって知ったに違いない。ときは暗い時代に突き進みつつあった。自国にあって、ニュースで知る日本の情勢は、そんなことばかりが強調されていたに違いない。こうやって実際にまだそんなことばかりでない実情を知り得たのは、同じであったことであろう。

ポール・ハリスは、気ぜわしい日程のなかで、帝国ホテルの庭に一本の月桂樹を残した。ポール・ハリスは、このような記念の植樹が好きだそうである。月桂樹は、ポール・ハリスの発案になるものであろうか。月桂樹は、日本人にとって一般的ではない。いわば洋風のものである。

この月桂樹は、戦禍のなかを生き延びた。それでも、時間の経過とともに当時の感慨が薄れ、老いも加わり、昭和42年には、氣息奄々(えんえん)という状況であった。帝国ホテルが立て替えを計画し、この月桂樹も取り除かれる手筈であった。東京クラブの矢野一郎は、これを植え替えてももたないとみて、数百本の挿し木を取って、慈しみ育てた。その何本かが甦った。その一本は、いま記念館の庭に生育している。

ポール・ハリスは、後にこの時のことを回想記に書いている。「この船には、当時国際ロータリーの理事で、以前の東京クラブ会長の宮岡恒次郎が乗り合わせていて、その宮岡がつねにそばにいてくれてよかったこと。ホノルルから横浜まで、8日間、天候は荒れ、波は高かったこと。横浜に入港した船の甲板から見た富士山が壮麗であったこと。そして、帝国ホテルでの記念植樹が非常に印象深い儀式であったこと。京都で二条城や樹齢200年にもなる桜の木が興味

深かったこと。大阪の歓迎会場で、自分の胸像が置いてあるのに一瞬びっくりしたこと。」などなど。

このなかで、米山のことについて、次のような記述がある。

米山とは、このとき初めて会った。昼食時の紅葉館では、その米山がじきじきに私の世話をやき、箸の使い方を教えてくれた。この微笑みを絶やさず、端正な容貌の日本人紳士とのこれが初めての出会いとは思えなかった。その理由は、米山の等身大の青銅の胸像が自分のオフィスにあり、毎日それが目に入っていたからである。ただ、実際の表情豊かな顔は、予想していたより若々しかった。温厚な人柄のおかげで、たくさんの責任ある仕事を抱え込んでも、過度の心労に悩まされることがないのが若々しさの原因らしい。」など。



ポールハリスの植樹



月桂樹三世
(北の丸公園)
山田 利明

【幹事報告】



1. 地区事務所よりジェニファージェンズTRF管理委員長来日にもなうロータリー財団フォーラム及び歓迎会の案内
2. 秩父手をつなぐ育成会よりチャリティーコンサート後援のお願い

来週の秩父との合同例会の送迎については、午後5時に高田さんに最初に乗ってもらい、各会員を順次乗せる予定になっています。

出席率 62.5%

プログラムについて

6月	4	木	通常例会（会員卓話）	理事役員会
	11	木	秩父合同例会へ振替	6月9日
	18	木	休会	
	25	木	一年を振り返って	
7月	2	木	通常例会（会長所信表明）	理事役員会
	9	木	休会	
	16	木	通常例会（各委員会発表）	
	23	木	休会	
	30	木	親睦例会	



四つのテスト

高田 富康会員

6月に入りました。私は正直ロータリーの友をあまり読んでいないのですが、6月号を見ていて、好きでつながるというロータリー親睦活動グループの記事が載っていました。120の親睦活動グループがあるという事なので、楽しみかなと思います。

ロータリーの友の音読

Rotary JAPAN
ロータリーの友



ロータリーの友6月号

にっぽんふうど

五十三次つまみ食い

江戸・日本橋

土山

水口

石部

草津

大津

京・三条大橋

器がつくる「美味しさ」

弥次喜多とともに江戸・日本橋をたち、東海道を歩く旅。二人のドタバタに笑いながら、各地のおいしいものをまわし食いつづけるうちに、あつたという間に京都、早瀬、茶屋の京美人に声をかけられ、弥次さん喜多さんですが、返ってくる言葉の違いに面白さを感じる。これは宮様のお膝元、言葉も習慣も江戸とはまるで違いますが、初めての京都に戸惑うのは私も同じで、二人はそんなことお構いなしにいつもの調子でしゃべっている。やはり、私とは器が違うのかな。

器と言えど食器は料理を際立たせる大切な存在。日本では素材や形の違いは食事を演出してくれます。茶わんや汁わんは持ち上げやすく、直接口を付けられるよう薄く作られて、豆腐や炊き合わせの器は水分がこぼれないよう深みがあり、魚血は平らで骨など取りやすいように工夫されています。美しさだけでなく使いやすさを兼ね備えた食器は最高の様式美。だから僕は「おいしい」を「美味しい」と書きたくなるのです。

ところで、陶器と磁器の違い、すく簡単！に言うと、土や粘土を原料に比較的低温で焼き上げたものが陶器、石を砕いた粉を練り、高温で焼いたものが磁器です。陶器はやや厚みがあり、素朴な風合い。備前焼、信楽焼、益子焼などが有名です。磁器は、有田焼や九谷焼に代表されるように、白地に描く模様の色映えがよく、華やかな印象

海の向こうの食卓事情

ではヨーロッパでは、そもそも食器に何を求めているのかと言えは、主に硬いパンを皿代わりにする「トレンチャー（トレンチ）」が貴族、平民問わず使われていたそう。食事は基本、手づかみ、ワイルドだったんですね。ちなみに肉汁を吸ったパンは、後に施しとして配られることもあったとか。

とはいえ、貴族は木製や銅など金銀製の器も使っていたよう。よく、銀食器は毒に反応するので宮廷で使われていたと言われますが、どうやら本当のことみたい。当時

毒としてよく使われたヒ素に含まれる硫黄に銀が反応し、黒く変色反応する性質を利用したそう。ああ恐ろしい。もともと現代では、銀食器が変色しない毒物の方が多く、銀製品に毒物検知の機能を期待しない方がよさそう。命を預かっているあなた、どうぞ別の方法で身を守ってくださいね。

さて楽しかった「にっぽんふうど・東海道編」も京都到着で一段落。僕の独断と偏見で「つまみ食い」してききましたが、いかがだったでしょうか。どこまでも「しき」を貫いて盛り上げてくれた、弥次さん喜多さん、そして何より年間お付き合くださった皆さんに「ありがとう」をお伝えしてこの旅の「美味しさ」はこれでおいしまし。本当にありがとうございました。

イラスト：ライトマン